



出村嘉史さん

私の研究は「都市形成史」を軸にしています。歴史を扱っていますが、目的は昔を懐かしむことではありません。これからの街をどう計画し、どう運営していくかを考えるために、過去を見ています。歴史を掘り起こしていくと、今の常識では考えられないようなことが実際に起きていたと分かる。そこに、これからを考えるヒントがあると思っています。

岐阜の街を調べる中で、特に面白かったのが明治期の街づくりです。元々岐阜は長良川とともに発展してきた街でした。そ

柳ヶ瀬から考える街の形

新しい挑戦しやすい場所に

喫茶店前で実施したテラスの仕組み化の取り組み。岐阜市神田町で（岐阜大提供）



こへ1886（明治19）年に鉄道が通る。でも、当時の駅周辺はまだ農地か湿地ばかりで街はなかった。

そのときに、今の柳ヶ瀬につながる街の骨格を描いたのは、行政ではなく町衆でした。商売をしていた旦那衆が夜な夜なお寺などに集まり、こういう街になつたらいいと議論しながら写真を描いていった。長良橋通りや柳ヶ瀬本通りも、そのときにつくられています。しかも道路整備の資金まで町衆が出していた。測量技術を持っていた県

に対して、町衆側が工事を発注する形だったんです。今とは真逆ですよ。歴史を見ると、今の思い込みから一回フラットになれる。

最近取り組んでいるのが「テラス」の研究です。2024年度にオランダに滞在し、街の風景が魅力的に変化していることに気がきました。道路や広場に人があふれ、みんな外で楽しそうに過ごしている。テラスって、外にテーブルや椅子を置いて、居心地をよくするだけのものだと思っていました。オランダではテラスは沿道の商店の営みを加速させる社会の仕組みになっていたのです。

日本では、道路は基本的に「通るための場所」。それが人が立ち止まり、座り、会話を楽しむことにも公益性があると考えられている。街で人が楽しんでに過ごしている風景そのものが豊かな街の証拠なんです。

柳ヶ瀬周辺で「テラスの仕組み化」に向けた社会実験を行いました。正式な許可を得て、老舗喫茶店の前の道路にテーブルや椅子を出して滞在空間をつくる。多様な店舗の表情が路上へ出てくる風景が豊かさにつながります。

柳ヶ瀬では、定期市「サンデービルディングマーケット」や、車道活用実験「パークライン」にも関わってきました。それなりに成功した「にぎわいづくり」と思われがちですが、狙っているのは一時的に人を集めるイベントではなく、人が出会い、新しいことを始める土壌を育てることなんです。

誰かが常に挑戦し続けないと、街は持続できません。50年前の柳ヶ瀬を知っている人は「衰退した」と言いますが、かつての盛り上がりも誰かが新しいことを始め、生み出し続けた結果だったはず。新しい挑戦をする人が活動しやすい場所であることが、街の豊かさにつながると思っています。

（構成・平子宗太郎）

でむら・よしふみ 社会システム経営学環教授。専門は都市形成史・景観デザイン。京都大学院修了。博士（工学）。1975年生まれ。

